特集レポート

改元記念シンポジウム

令和２年度日本博イノベーション型プロジェクト
助成：文化庁／独立行政法人日本芸術文化振興会

古代首都なにわと八十島祭

～古きを知り・大阪の明日を想う～

平安時代から鎌倉時代にかけて、
新天皇が即位されて大嘗祭が行われた次の年、
大阪・難波（なにわ）で、数百人規模の宮中祭祀が行われていました。
天皇即位儀礼の一つ「八十島祭」です。
これはどんなお祭りで、
なぜ大阪で行われていたのでしょうか。
関西・大阪21世紀協会は、
平成から令和への御代替わりを機に、
この八十島祭の伝統を掘り起こし、
古代大阪の歴史を再考するシンポジウムを開催しました。

（２０２０年11月30日・松下ＩＭＰホールにて実施）
主催・関西・大阪21世紀協会
共催・大阪観光局、フェスティバーロ
後援・関西経済連合会、関西経済同友会

古代首都「難波宮」の基壇跡（大阪市中央区・難波宮跡公園）。孝徳天皇が即位した645年、ここで大化改新が行われた。

関西・大阪21世紀協会
理事長　**﨑元利樹**

古来、日本人は万物に魂が宿ると信じ、畏敬の念を抱いてきました。古代においては、難波・八十島を日本の国土に見立てて、島々の神霊を新たに即位した天皇の身体にいただくことで、国土の繁栄と安寧を祈る「八十島祭」が行われていました。これは日本人の自然観を象徴するものです。

当協会は、文化庁が推進する「日本博」事業に、本シンポジウムをはじめとする八十島祭の伝統を掘り起こす取り組みを提案し、採択されました。時代が平成から令和になった節目に、大阪・難波の歴史の厚みを見直すとともに、日本人のアイデンティティを再認識する機会にしたいと考えています。また、2025年大阪・関西万博の開催に向け、大阪の魅力を発信するヒントを探り、大阪・関西の活性化に貢献する機会となれば幸いです。

日本博…文化庁が推進する2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会を契機に、総合テーマ「日本と自然」のもと、「日本の美」を体現する美術展や舞台芸術公演、文化芸術祭などを全国で展開するプロジェクト。

本シンポジウムは、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、無観客にて行いました。協会賛助会員の皆様およびシンポジウムに参加を希望されていた方々には、当日の模様を収録した映像をオンラインでご視聴いただきました。

八十島祭

岡田荘司氏
國學院大學名誉教授

即位儀礼として重視

天皇の即位儀式として重要な大嘗祭は、7世紀後半の天武天皇の時代から始まりました。そして、これと併せて重要なのが、平安時代に始まる「八十島祭」という儀式でした。御代が替わるごとに天皇の身体の保全を図るもので、天皇に遣わされた祭使たちによって、難波の津で執り行われました。

この儀式の最も古い記録は、平安時代初期の国史の一つである『文徳天皇実録』（文徳天皇：827-858年）に見られます。嘉祥3（850）年に、天皇の遣いである宮主（みやじ＝占いや祓いを行う天皇専属の祓い師）、神琴師（しんきんし＝琴を鳴らす遣い）、典侍（ないしのすけ＝宮中で天皇のお側近くに仕える高位の女官）、御巫（みかんなぎ＝神事に奉仕した巫女）などが、「摂津国に向かひ、八十島を祭る」と書かれています。八十島という言葉は多くの島々（＝国土）を意味し、国生み神話に基づいた国土の生成発展を象徴しています。

八十島祭は、鎌倉時代初期・後堀河天皇時代の1224年まで、374年間にわたり22回行われました。初回だけは大嘗祭の前年に行われましたが、以後は大嘗祭の翌年に行われています。また、戦乱で中止されたことや、鎌倉時代に入ると即位の数年後に行われたこともありました。

八十島祭の式次第

八十島祭は、内裏（京都御所）から出立する「使立（つかいだち）」の儀式で始まります。宮主が天皇に御麻（おおぬさ）を奉り、天皇はこれを撫でて息を吹きかけて返されます。その後、典侍が御衣（おんぞ＝天皇の着衣）の入った箱を受け取り、宮主らとともに祭場である難波の津へと向かいますが、祭場の正確な場所は分かっていません。

難波の津に着くと、まず宮主が西に向かって御麻を捧げ、お祓いをします。次に典侍が箱から御衣を取り出し、西方の海に向かって振り動かして海風を受けます。この作法には、大八洲（おおやしま＝日本の古称）の島々の神霊を天皇の御身体にいただくという意味があります。天皇の御身体の保全を祈ることは、すなわち国家、国土、国民の安寧と安泰を祈念することであり、この祭祀の本義はそこにあるのです。

こうして最後に祭物や神饌を海へ投げ入れ、内裏へ帰還した典侍は、御衣を天皇に返上します。このとき遣いの祭使は、「御祭平安に奉仕（おんまつりへいあんにつかえまつる）」と奏上します。

西に向かって

昭和の初めに制作された絵巻『八十島祭絵詞』には、平安時代後期の八十島祭のようすが描かれています（下図参照）。ここでは住吉の浜まで出かけて祭りを行っていますが、難波の津であれ、住吉の浜であれ、重要なのは西の海に向かって行っていることです。大嘗祭は御所から伊勢神宮のある東または東南に向かって行われますが、八十島祭は西に向かって行われるのです。「八十島」という言葉は日本の国土を象徴しており、国生み神話の淡路島をはじめ瀬戸内海の島々、さらにはそこから日本全体にわたる広がりを意味しています。つまり西を向くということは、日本の国土を見晴らしているのです。

また、御麻によるお祓いの作法などは住吉信仰に繋がりますし、御衣に西からの海風を受けて八十島の神霊をいただくという作法は、生國魂（いくくにたま）信仰に繋がります。さらに、海に向かってお供え物を投げ入れるというのは、島々に宿る神のご加護をいただくという国生み神話に基づくもので、日本の国土の生成発展を象徴する儀礼でもあります。

伊勢に向かって東向きに行う大嘗祭が最も大事なことはいうまでもありませんが、それとともに重要視されていたのが八十島祭です。古代から中世前半にかけて、西に向かって天皇の遣いが派遣され、「海の大嘗祭」ともいうべきお祭りが行われていたことは、歴史的にも文化的にも、大きな意味を持っていると思います。

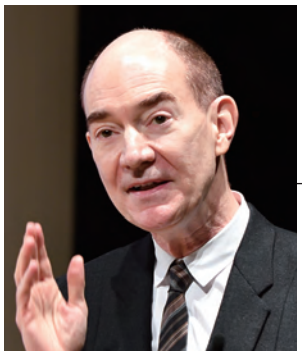
岡田荘司氏　1948年、神奈川県出身。73年、國學院大學大學院文学研究科修士課程修了。國學院大學神道文化学部教授、同学部長、神道宗教学会会長などを歴任。主要編著書に『平安時代の国家と祭祀』、『日本神道史』、『大嘗祭と古代の祭祀』など。

『八十島祭絵詞』第1巻
＜京都御所を出立＞

八十島祭を斎行する宮主が、出立にあたって内裏に参内。高位の女官・典侍が天皇の御衣を受け取ります。

（p9に『八十島祭絵詞』を解説しています）

豊國神社所蔵



前近代日本の価値を情報発信する方法

ロバート キャンベル氏
国文学研究資料館 館長

古典籍を活用する

国文学研究資料館（国文研）は、日本の1300年間のさまざまな歴史記録や、明治期以前の「古典籍」と呼ばれる書物などを約2万点所蔵しています。国文研はこれらをデジタルアーカイブ化し、日本文化の多様性と魅力を広く発信するプロジェクトを進めています。こうして大学共同利用機関としてのミッションに加え、一般の人々の学びに応え、未来に向けたイノベーションにも貢献したいと願っています。

本日は、八十島祭をテーマとするシンポジウムにあたり、日本文化を理解するため、古い文献や資料にどのようにアクセスし、新たな価値創造につなげていくかを、国文研の活動と併せてお話しいたします。

古典籍から得られる情報はとても多くあります。当時の人々が書物からどういう感性や知識を得ていたのかを知ることは、私たちの未来を豊かにするヒントを得ることにもつながります。国文研が2017年から公開している「新日本古典籍総合データベース」は、そうした取り組みです。キーワードから古典籍が検索できるもので、例えば、大阪で建物や庭を設計するにあたって、歴史的な和のテイストを取り入れたいと考えたとき、これを使って17～18世紀の大阪の意匠を調べることができます。八十島祭のような文化資源を探し出し、大阪の魅力を再発見したり、それを観光施策に活用したりすることもできます。

この度、凸版印刷が『八十島祭絵詞』をデジタル4K動画にされました。私たちも4年前から同社と協力して、国文研が所蔵する文化財をデジタル画像にして活用する「デジタル発和書の旅」という共創プロジェクトを進めています。ここで重要なことは、古典籍の情報を使って何をするかです。

江戸時代の人々の心

18世紀後半から明治時代まで、日本各地で毎年のように「絵入り地誌」というものがつくられました。安全に楽しく街道を旅するための、宿場や寺社、名所などの絵や解説が入ったツアーガイドのようなものです。私たちは文献観光資源学と呼んでこれを研究しており、歴史に埋もれて忘れられている事柄を再発見することを重視しています。

こうした文献は日本各地に数多く見られます。関西では18世紀から19世紀の初めにかけて、秋里籬島（あきさとりとう）が、京都や伊勢、近江など数多くの名所図会（絵入り地誌）を作りました。これは江戸にも影響を与え、斎藤月岑（さいとうげっしん）が『江戸名所図会』という20冊もの大作を著わしました。

大阪では『摂津名所図会』が有名です。堂島の米会所や天満の青物市場など、当地の賑わいが絵と文字で描かれており、ページをめくりながら、まさに空間移動をしているような気分にさせてくれます。また、伊丹の酒造りや堺の鉄砲鍛冶、天神祭の奉納花火や船渡御など、仕事や観光、娯楽、信仰について、当時の人たちがどのような風景に心を寄せていたかが分かる貴重な資料でもあります。

古典籍を活用して新たなものを生み出すことは、とても重要です。アニメーション作家の山村浩二さんは、江戸中期の浮世絵師・鍬形蕙斎（くわがたけいさい）の絵をモチーフに、『ゆめみのえ』というアニメーション短編作品を作り、ヨーロッパの映画祭で受賞しています。このように、大阪をテーマとして、大阪や関西のアーティストと地域の歴史資料とをコラボレーションさせた作品を生み出すこともできるでしょう。東京では三越伊勢丹百貨店で、江戸時代の料理レシピ本から当時の料理を再現するワークショップとセミナーを開催しました。

このように、さまざまな歴史記録を大阪で培われたスピリットを活かし、新たな勇気や豊かさにつなげる活動に、微力ながら尽くしていきたいと思っています。

ロバート キャンベル氏　ニューヨーク市出身。専門は江戸・明治時代の文学。江戸中期から明治の漢文学、芸術、思想などに関する研究を行う。テレビのニュース・コメンテーターや新聞・雑誌連載、書評、ラジオ番組出演など、さまざまなメディアで活躍。

『八十島祭絵詞』第1巻
＜京都御所から淀の津へ＞

御所を出立した一行が、淀川を舟で下るため淀の津へ向かいます。百種ものお供物も用意されました。